

一本刀土俵入 二幕五場

長谷川伸



〔序幕〕

第一場 取手の宿・安孫子屋の前

第二場 利根の渡し

〔大詰〕

第一場 布施の川べり

第二場 お蔦の家

第三場 軒の山桜

駒形茂兵衛

老船頭

筋市

お蔦

清大工

河岸山鬼一郎

船印彫辰三郎

お君

酌婦お松

船戸の弥八

いわしの北

同 お吉

波一里儀十

籠彦

博労久太郎

堀下げ根吉

おぶの甚太

一
伊兵衛・女房おみな・料理人・帳付け・通りがかりの
人々・近所の人々・赤金の升・盆持ちの良・渡しの船
夫・渡しの客・子守子（一・二）・八公・買物の男女・
二
そのほか。

一本刀土俵入 二幕五場

〔序幕〕

第一場
取手の宿・安孫子屋の前

常陸の国取手は水戸街道の宿場で利根を越えると下総の国。渡しはその近くにある。

取手の宿場街の裏通りにある茶屋旅籠で安孫子屋の店頭は、今が閑散な潮時外れである。それは秋の日の午後のこと。

（安孫子屋は棟の低い二階建て、前と横とがT字型に往来になっている。角店のこの家は突ツつきが広い土間、その他は外から余り見えない。階下と二階の戸袋は化粧塗りの、漆喰細工で、階下は家号を浮きあがらせた黒地に白、二階は色漆喰の細工物で波に日の出）
（安孫子屋の角柱の処に菊の鉢が一つ置いてある。外側の窓の脇に榎の老木があり竹垣を四方に結ってある。

その中で秋草が少し咲いている)

(二階は三尺障子が閉まっている)

店の前に料理人、帳付け、酌婦お吉、お松、その他が立って、道路の向うでしている喧嘩の方を見ている。そつちの方から喧嘩する男の声が聞えているが、だれの眼にもまだ見えていない、二階では近在からきている放蕩者が、酌婦を相手に遊んでいると見え、三味線の爪弾きの音が聞える。

料理人 (爪先立ちをして喧嘩の方を見る)

お吉 (料理人に) 見える。

料理人 うんにや見えねえ。

お松 (少し酔っている) こんな時はのツぽが得だとくと思つ

たらそうでもないんだね。

料理人 何をいやがる。おツ、人が出てきた。

お松 まさか鬼は出てきツこないさ。

帳付け お松どんお前まえまた酔ってるな。酔うもいいがお前は質がよくないからなあ。やあ、人がみんな押し出されたように横町から出てきたぞ。

子守子 (息せき走ってくる)

料理人 あれツ雪崩なだれを打って人が——あ、駈ける、みんな駈けてこつちへ来る。

お吉 (子守子を捉まえそうにして) だれが喧嘩してるんだい。

子守子 ふなど船戸やの弥こうあ公こうなんだよ。

お松 えッ、弥八の奴また喧嘩か、仕様のない男だねえ、あ

れと来ちやあ。

帳付け お松どんそんなことを当人の前でいうじやないぜ、頭を半分ブツ欠かかれるか知れないからなあ。

お松 いくらあたしだって、真逆まさかあの無法者の前じゃ、迂闊に口を聞ききやしませんよ。お薦さんのいい草じやないが、体をやくぎもちあつかに持扱もちあつかつてしまつても、まだこれで命は惜しいや。

料理人 (熱心に見続けている) あッ有難え、喧嘩はとうとうこつちへ流れてきそうだ。やあ、追つかけてるのは弥あ公だが、逃げてくるのはどこかの若夫婦らしい。

お吉 あれッ、だれだか、仲人ちゆうにんにはいった——。

お松 どれどれ。

帳付け (お松に) おいおい、滅多なことはいつちやいけな

いよ。家が迷惑するから。

お松 (耳にもかけず) ありや二、三日前に中食をしてつた日光街道の木崎きじきの博勞だよ。

帳付け 叱ッ叱ッ、黙った黙った。

お松 (口を掌で叩き) あわわわ。

土地の男女が逃げるようにやってきて、二つの群れとなり、二つの道の端に佇んで喧嘩を見ている。婚礼して間もないらしい若い夫婦伊兵衛、おみなが、手を執り合つて逃げてくる、後から船戸の弥八(二十八、九歳) 船夫にて乱暴者が追いかけるきた。

弥八 (伊兵衛を捉える) 何をしやがる。(振り払う伊兵衛を又捉えて引戻す)

おみな (夫の大事と引返し、おろおろと伊兵衛を氣遣う)

博労木崎の久太郎 (四十二、三歳) 仲裁しようとして弥八に追いつく。

久太郎 哥兄あにいや、まあさ、勘弁してやってくれ。当人だつて詫びをいつてるんだ。なあ、もういい加減に勘弁してやってくれ。俺からも頼むからよ。な、もういいだろう。根も葉もあることではねえ、足を踏んだ踏まねえの喧嘩じゃねえか。

弥八 厭だ。

久太郎 何ッ。(むツとしたが、氣を取り直し) そういったものじゃねえ。

弥八 黙つてろい。借せツ。(久太郎が持っていた馬の脊を

奪つて、伊兵衛を打つ)

おみな あれッ。(伊兵衛を庇かばわんとして、弥八に打たれる)

伊兵衛 (憤然として弥八の腕を押え) 温和おとなしくしていれば

いい気になり、畜生に穿かせる物でよくもぶつたな。

おみな (おろおろと伊兵衛に取り縋り、何かいおうとすれ

ど声が出ぬ)

弥八 馬の脊でヒツばた敲いてやった、それがどうした。

久太郎 どうもしねえ、こうしてやらあ。(馬の脊を引ひツ手たく繰

り弥八を打つ)

弥八 あ痛え。やい止せ、痛えやい。(久太郎から馬の脊を

奪わんとする)

久太郎 (いつかな放さず) この野郎。いい加減にのさばれ。

弥八 寄越よこさねえと蹴殺すぞ。

伊兵衛 (弥八の脚をとって引く)

弥八 あわわ。(引ッ繰り返る、直ぐ起きあがるを、久太郎が馬の脊で打って倒す、又起きるを伊兵衛が蹴り倒す)

久太郎 ちツとは懲りたか、この大馬鹿野郎。

伊兵衛 顔をよく見憶えたから、川向うへ来てみるがいい、ただでは帰しはしないから。

弥八 (瓦破と起き) 待つてろッ。(安孫子屋へ飛び込む)
料理人 あれッ。(家の中へ向って) 庖丁を片付けろ、庖丁を、(駈け込む奥の方で声がする) 庖丁を。(帳付けその他も駈け込む)

久太郎、伊兵衛夫婦は別々の道へ走って去る。見ていた男女も傍杖そばづえを恐れて去る。お松とお吉だけが、家の前に小さくなっている。家の中でドタバタ音がする。

皿の壊れる音、棚から物の落ちる音などがする。

弥八 (声) 退きやがれ。あ奴等突ツ殺しちやうんだ。退

けえツ、退けツ。

料理人 (声) 何を乱暴するんだ、いけねえったら、放せ、

あツ危あぶねえツ。

二階の障子が開いて、酌婦お蔦(二十三、四歳)ほろりと酔った顔を出す。

お蔦 (口に啣くわえた楊子を吐き棄て、店の奥を覗き加減に見る、が見えないので、居どころを替える)

弥八 (刺身庖丁を持ち、肌脱ぎとなり、往来へ飛び出す)

料理人その他が店の入口まで追って出る、それから先へはだれも進み出ぬ。お吉とお松とは店へ駈け込む。

お蔦 (柱にもたれ、髪を櫛で搔きながら下を見ている)

弥八 さあど奴もこ奴も命をフン奪^{だく}つてやるから出てこい。

さあ。(ギロギロ見廻し) 畜生、みんな隠れやがったな。

駒形茂兵衛(二十三、四歳位) 汚ない単衣物一枚、素
足に草鞋を穿く、力士志願で親方をとり、漸く付け出
しにはなつたが、前途がないと親方に見限られ、旅興
行先で追い払われて通りかかる。

茂兵衛 (何とも知らず来り、弥八に行き合う)

弥八 (庖丁を擬して睨む)

茂兵衛 な、なにををするんだ、わしが知るものか。

弥八 野郎ッ。(逃げ廻る茂兵衛を追い廻す)

茂兵衛 (空腹のために、よろめき勝ちで、再々危うくなる)

わしは何も知らぬ、な、なにををするんだこの人は。(逃げ廻

る)

料理人その他はハラハラするのみで、挺身して弥八を
押える者が無い。

お薦 (じつと見ていて、疝癪を起し、盃洗をとって水を
弥八に浴びせる)

弥八 プツ。(顔を片手でツルリと撫ぜる)

お薦 水をかぶって少しは気が落ちついたかい弥あ公。

弥八 何だあ。(二階だと心づき仰ぎ見て) 手前お薦の阿魔
だな。

料理人 (素早く弥八の手から庖丁を取ろうとして仕損じる)

弥八 何をしやがる。(庖丁を振り廻す)

料理人 うわッ。(店へ逃げ込む)

茂兵衛 (喘んでいる息を安めている、弥八の行動に眼をつ

け、時々はツとする。二階のお蔦にも眼を向ける)

弥八 やいお蔦、よくも俺に水をヒツかけやがったな。下へこい、叩ツ斬つてやるから。

お蔦 何をいつてるんだい。

弥八 降りてこねえな。ようしツ、俺の方から押掛おしかけて行つてやる。

お蔦 来られるなら来るがいい、ここにいるお客さまを、だれだと思つているんだ、流れの三太郎親分だよ。

弥八 えツ、俺ンとこの親分がきてるのか、こいつはいけねえ、本当かおい。

お蔦 嘘だと思つたらあがつといで、親分に叱られるのも稀たまにや面白いだろう。

弥八 (庖丁を抛り出し) べら棒め、面白く叱られる奴が

あるもんかい。(茂兵衛に) やい、手前よくも俺を大勢と一緒に
緒になつて殴りやがったな。

料理人 (庖丁を拾いとり、傍にいる男に板場へ持たせてやる)

茂兵衛 わしは今ここを通りかかったばかりで、何があつた
か、ちツとも知らないのだ。

弥八 胡麻化すない。俺は殴られている時に、ちやんと眼
を開いてたんだから、どんな奴とどんな奴が殴つたか知つ
てるんだ。手前も確かに俺を殴つた。

茂兵衛 そんな難題を吹ツかけては困る。

料理人 その人のいう通りだ。弥あさん、お前を殴つたのは、
さつきの博労と若え男とだけだ。

弥八 手前の知つたことか。(茂兵衛に) 手前、職は何だ。

(どこの三下かの意)

茂兵衛 角力すもうと取りになつている。

弥八 取りとり的小てきか。

茂兵衛 そうだ取り的小だ。横綱でも大関でも、一度はみんな取り的小だつた。

弥八 ふんどし、担こぎめ、豪儀ごうぎそんな口をきくくない。さあ野郎、俺と一緒に利根川とねがわべり沿へこい、二、三番揉んだ揚句、川の中へ飛び込ませてやる。

茂兵衛 水ならもう充分だ。

弥八 手前泳ぎを知らねえのか、犬いぬツ搔かきも出来ねえのか。茂兵衛 なあにそうでない、わしはきのうから水ばかり飲んで。 (はツと心づいて) 水みず中あたりが怖いからだ。

お蔭 (頬杖をついて見下している) 取り的小さん、そんな

人に交際つきあつてないで、さツさと行つておしまい、とどの詰りは、二つ三つ殴られた揚句に、いくらか銭をとられちまうよ。

弥八 (お蔦を睨む)

茂兵衛 なあに、銭なんか一文もない。

お蔦 へええ。一文なしで何処まで行くの。

茂兵衛 一先ず江戸へさ。

お蔦 ここから千住までだつて八里あるよ。第一、その川を渡るつたつて、十六文銭がいるんだ、それを一文なしでどうするんだい。

茂兵衛 どうにかなるだろう。

弥八 一文なしと聞いちや、可哀そうで殴れもしねえ。

お蔦 可哀そうだつて、あたしあ又、一文なしと聞いて、

落胆がっかりしたというかと思つた。

弥八 厭なことばかりいう阿魔だ。

お薦 前世ぜんせでは敵同士だったかも知れないね。

弥八 家の親分が惚れてなきや。とツくの昔に腕の一本ぐらいへシ折つてある阿魔だ——何だつてこんな阿魔ちよの、どこが好いんだ。

お薦 そういつて親分に聞いてごらん、何て返事するか。

弥八 知らねえ勝手に喋しゃべ舌くれ。(行きがけの駄賃に茂兵衛に

向い) 野郎。(蹴倒す) ヘツ、大飯食いの癖に弱え奴だ。

茂兵衛 (よろよろと倒れて) 待て。(起きあがり) よいしよツ。

(弥八の胸下に頭搗ずきをくれる)

弥八 あッ。(引ツ繰り返り、慌てて起きかけ、へたへたとなる)

茂兵衛 (力なくよろめき、辛くも踏止まったが、へたへたと坐る)

弥八 この取り的め。ああ痛え。(跛をひく如く、搗かれたところを押え) てッて。てッて。(折り曲つて去る)

お蔭 (弥八が倒れるのを見て喝采し、茂兵衛が意気地なく坐るのを見て惘れる)

お松 (お吉に) この人、病人らしいけど、さすが取り的でも力士は力士だねえ。

料理人 (門口に出て弥八の後姿を眺め) ヘッ、弥あ公の無法者も頭搗きを一本カマされて、耐こたえたと見えて、海老みたいに体を曲げて歩いてやがる。いい気味だなあ。

お松 (お吉に) だけどさあ。(茂兵衛を指さし) あれじゃ色気がなさ過ぎるね。いくらあたしでも、これを客に取れ

といわれたって願いさげだ。からだらしが無さ過ぎるもの。

お吉 そりやそうだよ、あたしだってさ。まだ弥あ公の方がいくらか増しだ。

お蔦 そうかねえ。

お吉 (前へ出て二階を見あげ) お蔦ちゃんてばさつきから、いつもの伝でポンポン弥あ公に当ってたけど、いいのかえ。

お蔦 どうなっただって構やしないさ。

お松 (お吉に) およしおよし、あの人のお株かぶなんだ。何をいったって徒む勞ださ。やけくそな女なんだからねえ。

茂兵衛 (漸く立ちあがり) もし、水を一杯飲ましてくれま
すまいか。

料理人 水ならその先に井戸がある。遠慮なく沢山たくさん飲んで行

きな。(他の者に)今の草双紙の読み続きを聞こうぜ。八、読んでくんな。

八公 ええ。(料理人と共に内へ去る)

お吉 あたいも聞こう。(お松の手をとり)お出でよお前さんも。

お松 暇ツ潰しに聞かかねえ。(お吉と共に内へ去る)

茂兵衛 (井戸の方へ行き、飲みおわって戻り)ゴッそあんで。(去りかける)

お蔭 ちよいとちよいと。

茂兵衛 (振り返ってお蔭を、ちよつと見ただけで歩く)

お蔭 取りのさん、お前さんと呼んでるんだ。

茂兵衛 わしか。何だね。

お蔭 お前さんどこが悪いんだ。

茂兵衛 おなかさ。

お薦 食い過ぎたんだね。

茂兵衛 根ツから食わないからいけないさ。

お薦 あ、そうそう、一文なしだといったつけねえ。

茂兵衛 乞食の真似すれば、人が銭をくれると行って教えてくれた者があるんだ。

お薦 する気かえ。

茂兵衛 するもんか。わしは立派な関取になるんだからなあ。
お薦 親方がそういつたのかい。見込みがあるとか何とか。
茂兵衛 親方は、見込みがないといった。

お薦 へええ。それでも立派なお角力さんになれるのかねえ。

茂兵衛 なれるさ、わしは一所懸命なもの。成れなかつたら

わし、どうしていいか判らなくなるなあ。

お薦 国はどこさ。

茂兵衛 上州だ。勢多郡の駒形こまがたという処だ。前橋から二里ば

かりの処さ。

お薦 成り損そくなつたら田舎へ帰つて、鋤すきくわを握るさ、家うちはお

百姓なんだろう。

茂兵衛 家か——家は灰になった。

お薦 焼けちやつたのかい。それで今、家がないの。

茂兵衛 無い。

お薦 親兄弟が田舎にいるんじゃないのか。

茂兵衛 わしは一人ツ子。おやじは何処どこかへ行つたまんま、

二十年も便たよりがない。どこかでどうにか成つたんだろう。

お薦 お母さんだけいるんだね。

茂兵衛 ああ居るよ。駒形の上広瀬川が見える処かみひろせがわに。

お蔭 なあんだ、家があるんじゃないか。

茂兵衛 なあに、そこはね、お墓さ。

お蔭 (急にホロリとなる)

茂兵衛 姐ねえさんはここのおかみさんですか。

お蔭 酌とり女さ。白粉おしろいで面の皮が焼けてる阿婆あば摺ずれさ。

茂兵衛 阿婆摺あばずれだつて、そんなことはない、わしはそう思

わない。(頭をさげて行きかける)

お蔭 お待ちよ取りのさん。お前、れつきとした親類はな

いのかえ。

茂兵衛 無いこともないが、わしに構つてくれる者はない。

お蔭 みんな気を揃そろえて薄情はくじやうでいやがるんだねえ。取りの

さん、お前、本当に、精せい出だして立派りつぱな関取せきとにおなり、辛いこ

とがあつたら、その薄情な親類どもの顔を思い出して、一所懸命おやり、出世したら故郷へ錦にしきを飾つて、薄情揃いの奴等に、土下座どげざさせておやり、屹きつといい気味だよ。

茂兵衛 いやあ、わしは親類の者に見て貰いたいとて、立派な関取にはならないんだ。

お薦 おや。ああ、見せて喜ばす可愛い女ひとがあるんだねえ。ホホホ、安くないねえ。

茂兵衛 わしは、故郷くにのお母さんのお墓の前で横綱の土俵入りをして見せたいんだ、そうしたら、もう、わしは良いんだ。

お薦 取りのさん、お前さんもお母さんが恋しいのだねえ。夢をよく見るだろうねえ。

茂兵衛 当り前だ。姐さんのお母さんも死んでしまったのか。

お薦 あたしのお袋は生きてるのさ。

茂兵衛 そんならわしより少し増しだ。

お薦 なあに——生きていたとて、どうで満足には暮しちや
いないに極まつてらあ。

茂兵衛 どうしてるか知らないのか。

お薦 遠いんだよ、国が。だもの、判りやしない。

茂兵衛 どこだ。

お薦 信濃の善光寺様よりもツと先さ、越中富山から南へ
六里、山の中さ。

茂兵衛 信州から先なら、わしはまだ知らない。

お薦 (思い出して泣けてくる顔を隠すとて、後向きにな
り、声を低めて唄い出す、故郷の名物、八尾やおの小原節) お
らちや友達や、さたね(菜種)の花よ、ハア、どこいしよ

のしよ。

茂兵衛 (お蔭を見あげ、黙って行きかける)

お蔭 (唄いつづける) 盛り過ぎればオワラちらばらと。

取りのさんちよいと。

茂兵衛 まだわしは八里余り歩かなくてはならないのだ、行くよ。

お蔭 利根川の渡し船は十六文だよ。(帯の間から巾着きんちやくを出して投げてやる)

茂兵衛 え。

お蔭 食べる物をあげたいけど、ここの家は各しみツ垂たれで話にならない。あたしの身上ありツたけやるから、どこかで何か食べてお行き。

茂兵衛 貰あつて行ってもいいのか。後あとで姐さんお前が困りや

しないか。

お蔭 あたしあ、年がら年中困りつづけだから、有つても無くつても同じことさ。遠慮しないで持つてお行き。

茂兵衛 半分貰います。

お蔭 各ツ垂れな、今に横綱になる取りのさんじゃないか。

茂兵衛 だつてな、わしも一文なしで困つてきたんだ、姐さんだつて一文なしでは。

お蔭 やけの深酒は毒ふかざけと知りながら、ぐいぐい呷あおつて暮す

あたしに、一文なしも糸瓜へちまもあるもんか。お前さん大食くらいだろうから、それじゃ足りない、これもあげるから持つてお行き。(櫛と簪を髪からとる)

茂兵衛 いいよ、いいよ、そんなに貰わないでもいいよ。

お蔭 持つて行くんだよ。(扱しりぎ帯に櫛簪を結びつける)

茂兵衛 へえ。

お蔭 (扱帯をたらし) さあ受取んな。何を愚図愚図して
るのさ。おや厭だ、泣いてるの。

茂兵衛 わしこんな女の人にはじめて逢った。

お蔭 横綱の卵は泣きベソだねえ。早くお取り、人が見る
とおかしいよ。

茂兵衛 へえ。(櫛簪を手にとる)

お蔭 (扱帯を引きあげ) もし、だれかに咎められたら、あ
たしに貰ったとおいい、出る処へ出て明りを立ててあげる
から。

茂兵衛 姐さんは、名を何というんでしよう。

お蔭 まだいわなかつたね。取手の宿の安孫子屋にいるだ
る、まで名はお蔭、越中八尾やつおの生れで二十四になる女だとはつ

きりいつておやり。

茂兵衛 へえ。(口の中で記憶するために繰返していつてい
る)

お薦 その代り、取りのさん、屹とだよ、立派なお角力さ
んになっておくれね。いいかい。そうしたら、あたし、ど
んな都合をしたって一度は、お前さんの土俵入りを見に行
くよ。

茂兵衛 あい——あい——屹となります。横綱に屹となって、
きよようの恩返しに、片屋入かたやいりを見て貰います。

お薦 どこへ飛んで行くか知れない体だけれど、楽しみに
して角力が興行うちにきたら番付に気をつけてみるよ。あ、取
りのさんの名は、まだ聞かなかつたつけねえ。

茂兵衛 わしの親方の名は立科磯右衛門たてしなと申します。

お薦 旅先から銭もあてがわずに追い返すような親方の名
なんかどうだつていい。

茂兵衛 銭は六百くれました。これで何処へでも行けといつ
て。けど、みんな食つてしまった。

お薦 あらッ、江戸へ追い返されるのかと思つたら、お払
い箱。じゃ、困るねえ。

茂兵衛 いえ、江戸へ行けば、親方のおかみさんにすが縫つて、も
う一度弟子にして貰います。おかみさんは、わしを可哀そ
うだといつていてくれますから。

お薦 何だか少し心細いねえ。

茂兵衛 いやあ大丈夫です、わしは、石に咬りついても横綱
に出世しなけりや。

お薦 その料簡りょうけんでみツちりおやり。名は何ていうのだい。

茂兵衛 わしは、駒形と名を付けて貰っています。駒形とい
うのは故郷くにの名だ。名は茂兵衛といひます。

お薦 駒形茂兵衛だね。

茂兵衛 あい。姐ねえさん、わし出世して三段目になつても、二
段目になつても、幕へはいろいろが、三役になろうが、横綱
を張るまでは、いかなことがあつても駒形茂兵衛で押通し
ます。

お薦 それだとあたし直ぐわかつていいねえ。じゃあ、お
行き、左様さようなら。

茂兵衛 はい。(嬉し喜んで頭をさげ) 左様なら姐さん。(行
きかける)

お薦 (見送り) 出世を待つてるよ。

茂兵衛 はいッ。(振返り振返り去る)

お薦 (頼杖つき鼻唄をやっていたが、気がつき) あれ、まだこつち向いてお辞儀してる。そんな嬉しかったのかねえ。(扱帯を振って) 駒形あ——。

船戸の弥八が、仲間の無法者、赤金あかがねの升公ますこう、いわしの北公、盆持ぼんもちの良公よしこうを引きつれ、祭礼の日の如く騒いで駈きたけ来る、四人とも鍬の柄その他を持っている。

升公 どこだ。どこだ。どこだ。

北公 わあツ、わあツ、わわツ。

良公 わツしよ、わツしよ。

弥八 (長脇差を帯し、先頭に立っている)

お薦 (冷然と見ている)

弥八 やあ、もう行っちゃったな。渡し場だ渡し場だ。(駈

け出しかける)

お蔭 ちよいとちよいと、弥あさん、又暴れるのかい、親分に叱られるよ。

弥八 お蔭の阿魔か。この嘘つきめ、親分は家にいたぞ。

お蔭 そうだろう。さつき帰るといって出て行ったもの。

弥八 嘘をつけこの阿魔。渡し場へ行つて、ふんどし担ぎを叩ツ挫け。(駈けだしかける)

お蔭 ヘン何だい、あたしが怖くつて、手出しがならないんだらう、ホホホ。

弥八 そうぬかせば、畜生、みんな、阿魔から先へ叩ツ挫け。

北公 だつてお前、あの女には家のがお前。(鼻の下へ指を二本やり) じゃねえか。

良公 怒られちや詰らねえから止せ。

弥八 渡し場へゆけ。それ行け、それ。

お薦 (鼻唄に小原節をうたいながら、手をのばして酒徳
利と盃洗をとり、盃洗に冷え爛の酒をつぐ。窓に腰かけ酒
を呷る)

第二場 利根の渡し

利根川渡し場。秋草がところどころに咲いている。川
には葦がところどころ茂っている。渡し船が岸を出て、
もう艀に代っていて、船首の方は葦に隠れ見えなくなっ
ている。

船夫が艀を押している。客が数人乗っている。どこかで「おうい——おうい」と呼ぶ声がする。

船夫 （陸の一方を向いて、手を振る）駄目だ駄目だあ。
ちよツくら待つててくれ、行つて帰つてくるからよう。

渡し船が去つてしまふ。

駒形茂兵衛、途中で食い物にありつき、前よりは健かすこやになつてゐる。

茂兵衛 おうい——おうい船頭さん——おうい。（駈けてくる）はあツ、行つてしまった。（陸揚げをした庭石らしいのに腰かけ、川を見ながら、懐中から食べ物を出す）川を渡つて安孫子まで一里ぐらいたと、飯屋の人がそういつた、安孫子からこがね小金まで三里、そうは歩けない。いやあ、歩か

なくちやいけないんだ、歩こう歩こう。小金から松戸へ二里だつていった。松戸から葛西かさい、千住まで四里。そうすると、あす中に親方の処まで行けるぞ。(食べ始める)

子守子が——前のは違ふ——負うた子を風車であやしなきたがら来る。

子守子 (子守唄をうたつて、茂兵衛の傍を通る)

茂兵衛 (水が欲しくなり、川端に行き、水を掬くんで飲む)

弥八が升、北、良を引連れ、そつと忍び寄ってくる。

子守子 (びつくりして、一方に避け、怖々見ている)

弥八 (升公等を制し、先頭になつて、そつと茂兵衛の背

後に寄る) えッ。(打ち据えんとする)

茂兵衛 (偶然、立つ)

北公 (棒を棄て) 野郎ッ。(諸手で、押そうとかかる)

茂兵衛 (引ツ外し、北公を背後から送り出す)

北公 (川の中へ翻筋斗打つて落つ)

弥八 さつきから手前を探していたんだ、どこを間誤間誤まごまごしてやがった。

茂兵衛 銭を貰ったから、飯屋さんに寄っていたんだ。

升公 道理で、船頭に聞いても見かけなかったという筈だ。

良公 引揚げちやあなくつて丁度よかつたな、弥あちやん。

弥八 手前をここで叩ツ挫くからそう思え。

茂兵衛 それよりも川へ落ちた人、いいかなあ。あの人泳げるのか。

良公 (茂兵衛に) こ奴ちツと変つてやがらあ。

弥八 人を舐なめてやがる。野郎ッ。(打つてかかる)

茂兵衛 何をする。(腹に耐えが出来ているので負けてはいないが、良と升とに左右から組まれ、負けそうになる)

弥八 (得物で茂兵衛を打たんと振りかぶる)

子守子 (怖々今まで見ていたが思わず) 人殺しいツ。

弥八 えツ。(慌てて振り向く)

茂兵衛 (良公、升公が「人殺しい」の叫びにぎよツとする隙に乗じて振り払い、落ちていた得物を拾って、二人を叩き倒し、弥八に向う)

弥八 (得物を投じ、長脇差へ手をかける) 抵抗てむかいすると、素そツ首くびを、叩き落すぞ。

茂兵衛 お前が何もしなければ、わしだって何もしない。

弥八 そうは行かねえ。

茂兵衛 やるぞ。

弥八 (じりじり下がる)

茂兵衛 お前。さっきの姐さんをどうもしなかつたか。

弥八 お薦の阿魔か。あんなすべた。(又さがる)

茂兵衛 すべた、じゃあない。

弥八 すべただ、大すべただ、父^てなしツ子を生みやがって。

茶屋女の癖にだらしのねえ。

茂兵衛 そんな人と違う。

弥八 違うもんか。そこらにいる子守ツ子に聞いてみる。

背中^の赤ン坊は今年の春、あの阿魔が生んだめ、そッ、こだ。

茂兵衛 嘘をつけ、あの人^が父なし子なんか生むものか、そ

んなことをいうと、こん畜生め。(弥八に打ってかかる)

弥八 (争つてみたが敵わず、殴られて逃げる)憶えてろッ。

(去る)

良公、升公はそれを見て、弥八より一足先に逃げ去る。

茂兵衛 憶えてろというのはお前達のことだ。腹がくちくくなればだれだって強くなるんだ、よく憶えとけ。

子守子 お角力さん、強かったねえ。

茂兵衛 え。ああ子守さんか、お前、見ていたのか。

子守子 ああ、始めから見ていたの。

茂兵衛 怖かったろう。わしが悪いのではなかったんだ。そう思っておくれ。

子守子 それは判ってるよ。船戸の弥あ公火事より怖い。馬鹿で無法で臍曲^{へそまが}り。そういつてあたい達うたってるのだもの。

茂兵衛 川へ一人落ちたつけが。

子守子 ありやい、わしの北さ。もうどつかへ泳^{およ}いで逃げちやつ

てらあ。

茂兵衛 泳ぎを知つてれば、安心だ、なあ子守さんその子、どこの子だ。

子守子 家の里うちツ子。

茂兵衛 本当に、安孫子屋のお蔭さんの生んだ子か。

子守子 そうさ。(赤ん坊が泣き出したので、茂兵衛から離れて、あやしつっ歩いて行く)

茂兵衛 (子守子に)なあ、その子、父てなしツ——。(いいか
けてやめる)

子守子 (子守唄をうたつて行きかける)

い、わいの北公、葦を分けて、そツと這いあがる。

茂兵衛 (云いやめてそらす眼に北公が見つかる)

北公 (泡をくつて、蛙かえるの如く、川へ飛び込む)

茂兵衛 おい。(とிட்டたが間に合わぬ)

子守子 (水音に驚き唄をやめて振り返り、何事もないと思
いうたいつづける)

茂兵衛 (石に腰かけ、食い残りを頬張り始める)

行々よしきり子が遠くで、近くで、交かたみ代りに鳴いている。

一本刀土俵入 二幕五場 第一場 布施の川べり

〔大詰〕

第一場
布施の川べり

十年程経った後の春のころのこと。下総の国安孫子から南東一里ばかりの利根川に沿った布施ふせは、その対岸が常陸の国戸頭とがしらである、その渡しを七里の渡しと称えている。

（布施は松戸方面から水海道へ往来にあたる。布施は布佐などと同様に中相馬なかそうまと呼ばれている土地）

布施弁天堂のある弁天山から少し離れて利根川が流れている。対岸は約半里の遠さ。

砂地へ曳きあげた、かなり大きな船を——船尾だけしか見えない——老船頭とその子の若者とがた膠たでている。船の中で船大工がマ、キ、ハ、ダ、を打つ音がする。

老船頭

(船底に茅火をあてながら唄う) はあ、利根はよい

とこ、

かみなかしも

上中下の、どこを見たとして、花が咲く。(若者に)こ

の船も新造下ししてから八年かなあ、来年あたりウワ廻り

かけずばなんめえのう。

若い男

なあにまだ来年ということはねえ、再来年だとしてい

いさ。なあ大工さん、そうだろうが。(船の中へ向って話し

かける、が、答えはなくて、マ、キ、ハ、ダ、かます打つ音のみす

る)

老船頭

船大工はマ、キ、ハ、ダ、かます音で耳が利かねえんだよう。

若い男

(唄う) はあ、いなさ吹こうが、ならい、が吹こが、け

さの寒さに、帰さりよか。

駒形の茂兵衛(三十三、四歳) 角力をやめてグレては

いった博徒仲間、約十年に鍛錬した体と共に、心もぐつとしま緊り、見違えるような男になっている。今は諸国をめぐる旅人風俗。道を誤つてここに来る。きた

茂兵衛（老船頭に）お仕事中を相済みません。取手とってへ参るのには、ここの渡しからでござんすか。それとも川下かわしもの渡しへ行つた方がようござんしょうか。

老船頭　ここからでもいいには良いが、取手のどこへ行くのか、先によつては下の渡しがいいか知れねえがのう。

茂兵衛　十年ばかり前に行つたことがあるのでねえ。お船頭さん、取手に安孫子屋という茶屋旅籠みてえなことをしてゐる家が今でもござんしょうか。

若い男　安孫子屋けえ。俺はよく知つてるが、そんな家、取手にやねえやあ。

老船頭 いやあ有るある有る。じやねえ元あつたんだ。

茂兵衛 へえ——じや今はもうござんせんか。

老船頭 無え。八、九年前だったか、ばくち、打ちの奴が、いやあこれはご免なせえよ。ツイ口が、すべ辻つた。

茂兵衛 構やいたしません。

老船頭 そうかね。安孫子屋は元繁昌していたが、流れの三太郎という親分が仕切つて買取つてから流行はやらねえ続つづきで、半年か一年かで止めてしまった。だからこの男なぞ色氣づいた頃にやもう無え、知らねえ筈だよう。

茂兵衛 へえ左様さようにござんすか。どうもご親切によく教えてくださいました、有難う存じます。

老船頭 (茂兵衛の慇懃さに、頗すこぶる好意を持つ) はい、いえ、何。もしまだ聞くことがあるなら、知ってる限り、喋舌る

よう、その代り俺あ、^た糲でながら返事いうがねえ。

茂兵衛 お言葉に甘えて少々伺います。その安孫子屋に就いて内輪のことまでよく知っている人がおりましたよ。か、ご存じじやござんせんか。

老船頭 船戸の弥八という人なら知ってるか知れねえ、流れの三太郎親分が流行病はやりやまいでコロリと死んだその跡をとつた人だからねえ。

茂兵衛 船戸の弥八か。弥あ公とか弥あさんとか、以前いつた男ではござんせんか。

老船頭 知ってるのかね弥八を、八さんをね。

茂兵衛 いえ存じちやおりません、名前だけ聞いたような気がいたします。変なことを伺うようですが、弥八の評判はようござんすか。

老船頭 さあ。(云い洩っている)

茂兵衛 判りました。あ奴、評判は良かねえんだ。

老船頭 (慌てて) そんなこともねえよう。

茂兵衛 なあに、ようござんす。もう一つ伺いてえのだが――

ねえお船頭さん。失礼申しあげて腹を立てさせるか知れませんが、安孫子屋にいた女を一人でも二人でも、ご存じやござんすまいか。

老船頭 (迷惑そうに) な、なにを訊くんだ、年寄りに。

茂兵衛 こ奴あ悪かった。ご免ください。

老船頭 やや、そういわれると却って痛いだ。昔のことなら俺だって、一度や二度はあすこで遊んだこともあるに。

茂兵衛 お薦さんという女を、もしや知っちゃいませんでしよ
うか。

老船頭 お薦ね、はてなあ、聞いたようだが、どの女のこと
だったかなあ。(船の中に向つて声をかける) おい清大工、
ちよつとこいよ。

老いたる船大工清吉が、船尾の上に半身を出す。

清大工 何だあ。用かあ。

老船頭 お前、取手の安孫子屋の阿魔に凝こつたことがあつた
のう。

清大工 (破顔して) 何をいうだえ。(顔を引込める¹)

老船頭 おうい清大工よう。冗談じょうだんコにきくではねえぞ。ここ
にいなさる人が知りたがつてるんだ。この人はだれか尋ね
てるらしいだ。

清大工 (再び半身を見せて) ほうか。だれのことだね。

¹ 「引込める」は底本では「引込める」

茂兵衛 お仕事にお手をとめさせて相済みません。もしや、十年ばかり前に、安孫子屋にいた女で、お薦さんという人をご存じではございませんでしょうか。

清大工 お薦というのかね。憶えていねえなあ。永くいた女なら大抵たいてい知ってるだがなあ。

茂兵衛 その時は二十三、四、色の白い、美いい女でしたが——
ご存じございませんか。

清大工 (老船頭に) お前知ってねえのか。

老船頭 知ってればお前を呼びはしねえ。

清大工 随分お前も凝って行ってたによう。

老船頭 利根川船頭は一つ女に凝らねえさ。それが定じょうほう法ほうさ。

清大工 そうでねえ。お前の凝ってたのは、ええと、お松と
いったけかなあ。

老船頭 そりやお前のだ。

清大工 そうそう。俺の女がお松だ、えらい酒食くらいだったけなあ。

老船頭 あの頃はまだ俺もお前も、まだまだピンピンしてたっけのう。

若い男 (慥たでている)

清大工 (感慨げんがいにうたれ、茫ぼうとしている)

茂兵衛 お妨さまたげして相済みません。取手へ参つて、判らぬまでも捜して見ましよう。

老船頭 はいはい。そんなら下しもの渡しがいくらか近かろう。

清大工 どれ仕事しべいか。(船内にはいる。やがて、マ、キ、ハ、ダを打つ音がする)

茂兵衛 ご免ください。(笠をかむって行きかける)

この辺の博徒親分波一里儀十の子分、おぶの甚太、籠彦、堀下げ根吉ほりさねきちの三人が飛んでくる。

籠彦 (物もいわず茂兵衛の笠を引ツ剥ぐ)

甚太 (茂兵衛の前に立ち塞がる)

根吉 (茂兵衛の背後から組みつく)

茂兵衛 (彦の肩を掴んで砂地に叩きつけ根吉の首筋へ手を

かけ、前へ廻して蹴放し、打ってかかる甚太の小手をとつて投げつける) 何をしやがる。(笠の台座をとつて棄てる)

根吉 いけねえいけねえ、人違いだ。

甚太 どうも、これは誠に済みません。

籠彦 (二人に罪を塗りつけるように) だからいわねえこ

とじゃねえ、違ってやしねえか、大丈夫かと俺が念を押し

たんだ。

根吉 何をいやがる、てめえ手前が、あれだあれだといったんじや
ねえか。

甚太 そうだとも、彦ツペがいけねえんだ。

籠彦 ちえツ俺ばかりわるもの悪者にするなよ。

茂兵衛 やい。もツとこつちへ寄れ。

甚太 へ。

茂兵衛 船頭衆、大工さんがお仕事をなすっている。邪魔に
なるからもつとこつちへ寄れ。

籠彦 へえ。

老船頭と若い男とは船の傍で、清大工は船の上に半身
を見せ、共に成行きを見ている。

茂兵衛 手前達はブ職か。

籠彦 へえ。自分より発はつします。お控はっえください。

茂兵衛 俺ぶさほうあ無作法だ。仁義は受けねえ。

籠彦 え。

茂兵衛 一家いっかはどこだ。

籠彦 かよう土足裾取りどそくすそとしましてご挨拶失礼しれいさんでござんす

がご免ごめんなさんせ、向むかいまして上うへさんとこんど初めてのお目

通とほりでござんす、自分は総州葛飾こわりの郡柴崎しばさきは波一里儀十若

い者しやう、籠屋彦左衛門かごやひんざゑもんと発はつし、ご賢察けんさつの通りとほりしがしがない者しやうでご

ざんす。

茂兵衛 よし判はんつた。お前は。

甚太しんた (仕方しかたなく) おぶおぶの甚太郎しんたろうといいます。

根吉ねきち (茂兵衛しげへいが眼まなこで訊きいているので) 俺おれあ堀下ほりげ根吉ねきちだ。

茂兵衛 波一里儀はいちりぎ十じゅうさんの吩咐いっつけでやつたことか、それとも一

存か。

根吉 (彦が、「親分がコレコレいうから」といいそうなの
で、押おツ冠かぶせて) 俺達一存だ。

茂兵衛 その仔細は。

根吉 だから詫わびをいつている。

茂兵衛 詫わびで済すます気でやったのか。

籠彦 そ、そりや云い懸がりだあ。

茂兵衛 次第によつては勘弁する。次第によつちやあ、勘弁
ならねえ。というのは更あらためていうまでもねえ、ブ職同士の
ことだからなあ。ええ、そうでござんしよう、そうだろう
が。

籠彦 へえ。

茂兵衛 どういう筋で間違えた、聞きこうぜ。おうお前まへいえ。

(二番確りしつかしていいそうな根吉を指ざす)

根吉 この土地に荒れ寺が一軒あるんで、そこがちよくちよ
くシキになる。きょうも昼間から場がひらけたところ、見
たことのねえ風来坊がきて、初めは何の不思議もなかった
が、だんだんやりとりが重かさなると、そ奴の素振りが怪しく
なつた、で。

茂兵衛 その男と人違いか、何だその男は、場荒しか。

根吉 イカサマ師だったんだ、気がついた時より奴が逃げ
た方が一足先。そこで手分けして追手に出て、どうも飛ん
だ失礼をいたしちやいました。

茂兵衛 そのイカサマ師が俺に似てるのか。

根吉 そういふ訳じゃねえんだが。

茂兵衛 おう、お前に聞かぬぜ。(甚太を指ざし)イカサマ師は

俺みたいに旅人姿か。

甚太 角帯をね、角帯をちやんと締めて。

茂兵衛 年ごろも人相も違うのか。

甚太 そうなんです。

茂兵衛 似たところなしの違うだらけで、イキナリ笠を引ツ
剥いで組んでかかる、打ってかかるじゃあ、気の早い者な
らスパリとやるぜ。恩には着せねえが俺だから、今のぐら
いのところで止とまったんだ。馬鹿あ、以来、気をつけろい。

(川下へ行つてしまふ)

籠彦 何て野郎だ、厭な奴だったなあ。

甚太 ひでえ目にあつちやつた。だれだい、イカサマ野郎
が早替りで、あんな姿に化けたんだと、伶俐そうにいやがつ
たのは。

籠彦 (頭を搔く)

根吉 (茂兵衛を見送っている) てえした男らしい。おお、

度肚どぎもを抜かれて名前を聞いとくのを忘れちゃった。さぞあの人は俺達を嗤ってるだろう。

草角力の三役まで取った波一里儀十が、子分の筋市と溢れ浪士河岸山鬼かじやま一郎と来る。

根吉 こりや親分さん。先生も。(辞儀をする)

儀十 イカサマ野郎はこの頃取手へきてる奴だったとよ。これから行つて厳しく仕置きをするんだ。三人とも来い。

籠彦 へえ、お供します。

筋市 (根吉等に誇り気に) 理詰めで俺達がビシビシ攻めつけて見せるから見ててくれ。

河岸山 (刀を叩いて) この方となると最後のところは、是非とも拙者の受持じや。ハハハ。

甚太 親分。(今のあつたことをいいかける)

根吉 (甚太の袂をぐいと曳いて黙っていると眼顔でいう)

儀十 彦。上の渡し^{かみ}へ先へ行つて、船が出そうだったら待たせとけ。

籠彦 へえい。(飛んで行く)

儀十 さあ行こう。きょうは屹と面白えぜ。

上の渡しを指して儀十等は去る。話し声が少しの間、聞えてくる。イカサマ師といわれた船印彫師辰三郎(三十五、六歳)堅気に見える粹な服装かたちで、眼を配りつつ来る^{きた}。

辰三郎 (髪の中より采^{さい}を出し捨てる)

清大工 (その以前に船の内にはいってマ、キ、ハ、ダを打っている)

老船頭 (若い男と共に、今また糺たでかけた手をやめて、辰三郎に注目する。「この人が、儀十等に探されているのではないか」と思い) もし、もし。

辰三郎 えッ。(びつくりして、川下へ逃げ去る)

老船頭 あ——ソツと教えてやろうと思つたのに。

若い男 だけれど、イカサマ賭博ばくちをしたというから、どうもこれ仕方がねえさ。

清大工 (船の上へ顔を出す)又何かあつたのか。

老船頭 なあに、人が一人、駈けて行つただけだに。

清大工 あれだね。どんどん駈けて行かあ。

老船頭は糺たでを続ける。

船頭唄が風に送られて遠く近く、聞えてくる。

第二場 お蔦の家

取手の宿場から少し離れ、利根川をやや遠く望む高地にある一軒家の内。

（その家は古く建てられたもので、軒も傾き、壁も破れている。窓のある土間の上に、川魚の串刺しがくしぎ吊るしてある。畳敷の方には仏壇代りの箱に男名前の位牌が置いてある。片隅に飴売りに出る着物、笠などと道具がある。ここの家は母子二人ぎりで、母が飴売りに出て生活くらししているのだと直ぐわかる）

お鳶（三十三、四歳）子の愛にひかされて、独り身で、細々と生計を立てている。

お鳶（飴の景物につける小さな幟と吹流しを作っている）
お君（十歳か十一歳）折ってきた山桜の枝を位牌に供えている。

街の方で子供の声がする。

子供（声）夕焼け、小焼け、あしたも天気になあれ。夕
焼け、小焼け、あしたも天気になあれ。（遠くなる）

お鳶 お君ちゃん。お前いい子だ、燈火あかりつけておくれな。
（吹流しを作り続ける）

お君 ああ。

お鳶 気をつけてね、油をこぼさないように。

お君 ああ。(燧石を摺る、誤って指を打つ) あ痛ッ。

お鳶 (喫驚して起つ) どうしたの。指を打ったんじやないかい。どれお見せ。まあ血が出て来た。痛いだろうね、

我慢おし、ね。薬つけてあげるから、自分できつく抑えと

いで。(昔の名残りの葛籠の底から、成田山の疵薬を出す。

薬は辛うじて残っている) 少しシミるけれど、もうこれで

大丈夫、今、結えといてあげるよ。(小布れを探して結えて

やる) さあ、もういい。あしたの朝、もう癒っているだろ

うよ。(燧石を摺り、行燈に灯を点ずる)

入口を手荒く開けて、いわしの北公、前より約十年老けている。土間へはいる。入口の外に波一里儀十等が立っている。

北公 (見廻して) ちえツ、薄ツ汚ねえなあ。

お薦 どなた。おや。

北公 ちよいちよい見掛けるから、万更、忘れつ放しにもなつていめえ、北造だよ。(外の儀十等に) どうかおはいりなすつてください。おいお薦。きようは船戸の弥八親分の名代に、客人のご案内をしてきたんだ。粗相があつちやならねえぞ。

お薦 (ぐツと疝に障ってきたが、我慢して黙っている、お君が怖がっているので手招ぎして抱き寄せる)

儀十 (筋市、根吉をつれて土間へはいる)

河岸山、彦、甚太は外にあり、開放あけっぱなしの入口の外を往つたり来たりしている。

北公 向むこう地じの親分、どうかご遠慮なくお検あつためください。

儀十 じゃそうしよう。(お蔦に)俺あ川向うの中相馬なかそうまにいる波一里の儀十だ。

お蔦 どういうことでございましょう。

儀十 こんなこと、俺がじかにいわずともだ。市、訊きいて見ろ。

筋市 おッ。(ずツと進み出て)——お蔦、何だそんな面しやがって、お前の亭主に用があつてきたんだ。亭主を出しな。

お蔦 亭主ですって、ホホホ。あたしに亭主があるもんですか。冗談じょうだんでしょう。

筋市 おツと、そうは抜けさせねえ。ありや何だ、あすこの位牌は。

お蔦 ありやあたしの亭主の俗名が書いてあるんです。

筋市 その俗名の男を出すんだ。

お薦 お位牌になった人が出せますか。強^たって用があるのならようござんす、お君ちゃん、お父^{とつ}さんのお位牌もつといで。

お君 (母の顔を見て心配そうに) いいの。

お薦 ああ。この人達は、お父さんのお位牌にお話があるんだとさ。

お君 (位牌をとりに行きかける)

筋市 位牌が口でも听^ききやしめえし、そんな物はいらねえ。
お薦 (お君に) いらなくてからお君ちゃん、いいよ。

儀十 ええ手間がかかる。市、その阿魔と餓鬼を押えつけろ、他の者は家探^{やさが}ししろ。

外から彦、甚太が駈け込む、河岸山は入口の外に立つ

て内を見ている。

お薦 (押えんとする市の手を振り払い、掴みかかりそうにする北公に、吹流しにする色紙入りの箆ざるを投げつけ、お君を庇つて隅の壁に倚る) 何をするんだ、女子供たつた二人の家へ、大の男が大勢きて、腕づく沙汰を何だつてするんだ。あたしにそんなことをされる弱い尻はないんだ。

儀十 お前になくても亭主にある。構うこたあねえ、船戸のが承知してるんだ、押え付けろ。家探ししろ。

お薦 (市に押えつけられる) 何をするんだ。ばくち打ちの癖に堅気に向つて、そんなことをして済むと思うのか。

北公 (お君の襟を押えつけている)

儀十 (甚太、彦、根吉を指揮して、家探しをさせる)

河岸山 (土間にはいつている)

お君 お母さん、お母さん。

北公 ピイピイいうな。(お君の口を手で蓋する)

お鳶 (北に) な、なにするんだ、人の大事な子にそんなことをして、息が苦しいじゃないか。放してやっておくれ、頼むから放してやっておくれ。後生ごしやうだからそんなことをしないでおくんない。

筋市 蒼蠅うるさい、黙れ。

お鳶 何だつて大事な子にそんなことを。(猛然と起ちかか
る)

筋市 ええいつ。(手荒く引据える)

儀十 (自分も一緒になつて家探しする。が、何者もないな
い)

河岸山 (儀十に) どうだな親分。居らぬらしいではないか。

儀十 どこかへ隠れやがったか。みんな、家探しは止めろ。

同じ処を二度三度検めたところで仕方がねえ、市、手を放せ。

筋市 さあ放してやらあ。(お蔦から離れる)

北公 俺も手を放してやらあ。(お君をお蔦の方へ突ツ放

す)

お蔦 (お君を犇ひと抱き緊しめ、儀十等に敵意の眼を向ける)

儀十 根吉、手前の方がいい。阿魔に泥を吐かせろ。

根吉 へえ。(お蔦に) ツイ手荒くなつて済まなかつた、こ

れには訳があるんだ。お前の亭主というのは辰三郎、あの位牌に書いてあるからそうなんだろう。その辰三郎は死んでやしねえ、生きているんだ。

お蔦 ——えッ、そ、そりや本当なんですか。

根吉 本当とも、現に俺までがこの眼で見ただ。

お薦 どうして辰三郎だと、友達でもないお前さんに判つたんです。

根吉 俺あもとより辰三郎なんて人知りやしねえが、元はこの土地にいた升さんという人が、見知つていて、あの男なら関宿の浜棟梁の処にいた船印彫師だしぼりしの辰三郎といつて、十年余り前に行方知れずになつた男といつたので判つたんだ。

お薦 まあ——あの、生きていてくれたのか。お君ちゃんお父さん生きてるんだつて。

お君 どこへ行つてるんだらう。早くお家うちへくればいいのに。

河岸山 ははあ、こりやなかなか旨うまく胡麻化すて。

儀十 そうだね。ヘン。(お薦母子を侮蔑する)

根吉 辰三郎という男とお前さんとは、そこにいる子まで生なした深ふけえ仲だと判つてみれば、利根川を挟んで三堀ほりふせ布施、安孫子で姿を見かけたからは、どこへ行くものか女房子供のところと、こう見込みをつけるのが定式だろう。

お薦 そう伺えばよく判ります。嘘も隠しありません、あたし達母子は辰三郎の姿すらまだ見ないのでございます。根吉 親分、この人のいつてることは、嘘じゃねえと思ひますが。

儀十 じゃ、まだ寄りつかねえのか。

河岸山 どこかで余温ほとぼりを冷さましてから来る心算つもりか知れぬな。

籠彦 屹とそうだ。

筋市 (彦に) 黙ってるい。

北公　じゃあこうなすつては如何いかで、一先ず手前親分の処
までお引揚げになつては。

儀十　帰りには是非寄ると約束だ、では、お振舞いに与あずか
ろうか。

北公　直ぐに手前親分の方から、ここの家うちへは張り番を出
しますから、皆さん。どうぞ。

儀十　市と彦とはここへ残れ。

北公　それでは恐れ入ります、皆さんどうかご一緒に、目
と鼻の間ですから、張り番が上あがるのは直ぐでさあ。

儀十　じゃお言葉に随いましょう。さ、行こう。

入口から外へ北公、続いて儀十等が出て行く。最後は

根吉。

根吉　おかみさん、もし辰三郎が帰ってきたら、こう成れ

ば仕方がねえから、覚悟して終えしまというがいい。

お薦 もし。あの、家の人は何をしたんでしよう。

根吉 生馬の眼を抜くような、ブ職の間では許されねえ悪いことをね。

お薦 と申しますと。

根吉 堅気に化けたイカサマ師なんだ。（外へ出て戸を閉める）

お薦 まあ。（喫驚する）

お君 お母さん、もう済んだの。何、今の人のいったこと。

お薦 何、何んでもないさ、子供には判らないことなのさ。

（散乱した色紙をざる箆に入れる）それよか、もう直き、お父さんが屹と帰ってくるよ。

お君 お父さんでどんな人。

お鳶 お君ちゃんは、どんなお父さんだか知らない筈だ、お前が生れた時はもういなくなつたんだもの。

お君 あたい少しお父さんを憶えてる。

お鳶 どうして。

お君 だって、あたいがもつと小さい時、お菓子をくれて
いった人、あれが屹とお父さんだわ。

お鳶 そんなことがあつたかねえ。事によるとそうかも知
れない。(土間の窓が外からそつと開く) あれ。(取り纏る
お君を抱く)

窓から辰三郎が顔を出す。今まで近くに潜んでいたの
である。

辰三郎 あたしだ。

お鳶 どなた、どなた。(起って行き、ジツと見る) まあ。

辰三郎 奴等が帰って行つたのは知つているが、だれも残つてやしないだろうな。

お鳶 ええ、だれも。お君ちゃん、お父さんだよ。

お君 (土間へ駈け出し、入口を開ける) お父さん。

お鳶 そんな声するんじゃない。

辰三郎 (窓を閉めて入口へ廻る)

お君 お父さん、あたいのお父さん。わあ。

辰三郎 (お君を抱き緊め) お父さん、逢いたかつたんだ。

(咽び泣く)

お鳶 (入口を閉め、父子を畳敷へ行かせ、戸に心張棒を

かう) 早く、そっちへ行つて、早くさ。(畳敷に行く)

辰三郎 お鳶、永い間の苦勞、濟まない。

お鳶 お前さん、よく無事でいておくれた。あたし達には

それが何よりだよ。

辰三郎 何から何まで済まないことだらけだ。勘弁してくれ。

お鳶 何をいうのさ。

辰三郎 薄情な男をよく忘れないで、こうやっていてくれた。

親の死水しにみずもとらなかつた不孝の罰が今身に耐こたえる。これか

らは女房子の傍そばを、死ぬまで必ず離れはしない。

お鳶 そうしとくれ。ねえ、この子を見てやっておくれ。

お君 (二人の間に割込み、手習双紙の字を得意になって

見せ) お父さん、あたいこの字も知ってるよ。

辰三郎 うんうん。(お鳶に) 永い間の不人情が今更、我が身

ながら愛想がつきる。

お鳶 決して不人情じゃないよ、茶屋旅籠の女だもの、実じつがあるかないか、疑うのも無理じゃない。

辰三郎 それをいつてくれるな、辛い。でもなあ、志州鳥羽の港にいる時、こつちにいた頃知っていた良公よしかうつて奴があつたろう、あ奴が何か間違まちがいをして、逃げ歩いて鳥羽の港へきたんだ。良公からお前のことを聞いた時、女なんて到處で招かずとも靡なびいてくるものと、永い間己惚うぬぼれていた夢が一ぺんにさめてしまった。それから、こつちへ帰ろうと、船印だしを彫るはもとより、手当り次第に精を出し、一時は少し銭を貯めたが、病わづらつたので駄目になり、又稼いでいるうちに考えれば居ても起つても耐らないので、土産らしい物を持ちもしないで帰りは帰ってきたのだが。

お鳶 ああそれで判つた。

辰三郎 今の奴等が喋舌しゃべつたらうから隠しはしない。いくら何でも不人情をした上に、裸一貫では、敷居一つが越し難

いので、もとは慰みに憶えたイカサマばくちを。(胴巻に入れた金を出し) 見てくれ。剃刀の刃渡りだとは思いつながら、金が欲しさに手を振って、こんなに勝って取りは取ったが、直ぐに祟りたたが廻たってきている。こ、これじゃあ、何にもなりやしない。

お蔦 そんなに悔むには及ばない、夫婦親子三人で今から直ぐに、ここの土地を後にしよう。もしやお前さんが帰るか帰るか、死んだのだらうと思いつながら居ついたこの土地、もう未練なんかありやしない。

辰三郎 そうだ。どこへ行つても日は照つてる。逃げよう。

お君 (喫驚して) 逃げるの。

お蔦 そうじゃないそうじゃない。お母さんの国へ帰つて行こう、ね。

お君 ああ、あの唄のところだね。

お鳶 お君ちゃん、お母さんよりあの唄はうまいねえ。（辰三郎に）お前さん、そりや何。

辰三郎 （手習双紙の表紙の余白に、儀十宛の書残しをしている）これか。これはイカサマで取った金を返す、それに付けてやる手紙なんだ。どうで又、奴等はここへ来るだろうから、目に付くに極っている。（金を置く）

お鳶 汚ない金なら欲しくはない。

辰三郎 金は欲しい咽喉から手が出る程。だが、もし捕まれば腕一本へシ折られるか、五本の指をへシ折られるか、軽いところで中指かけて二本は不具かたわにされるだろう。不具になつては又お前達に苦勞をかける、それが怖いので欲しくてならないこの金だが、ここへ残して置くつもり心算だ。金が戻

れば、あ奴等は追いかけてなぞこなかるう。

お薦 そうだと有難いが、あ奴等ではどうだかねえ。

辰三郎 お君はおいらが背負^{おぶ}つて行く。

お薦 じゃあたしは、何もなければ、せめて子供の物だけは。まあこの子はお父さんにもう背負^{おぶ}さるの。お待ち、まだだよ。(持つて行く荷をつくる)

辰三郎 何、いいやな。(お君を負いかける)

お君 (辰三郎に)お母さんの国つて、知ってる。(頬に触り、肩を撫ぜなどしている)

辰三郎 (曖昧ながら)ああ知ってるよ。(お君の片手を握っている)

お君 じゃ唄も知ってるね。

辰三郎 ああ、知ってるとも。(両手を両手で握る)

お君 (得意になつてうたう) おらちや友達あ、菜種の花よ。
よ。ハア、どツこいしよのしよ。

お薦 (お君の唄を制そうとする)

辰三郎 (お君の手を撫ぜつつ聞いている)

お君 (唄う) 盛り過ぎれば、オワラ、ちらばらと。

土間の窓が開いて、茂兵衛が顔を出し、内を覗のぞいている。

お薦 (偶然気がついて) あら。

辰三郎 え。

急に窓が閉められる。

お君 (唄う) ハア、どツこいしよのしよ。これお母さんに教わつたの。

辰三郎 (お薦に) 何だ。

お薦 気の故せいかしら、今その窓から、だれだか覗いたよ
うだったけれど。

辰三郎 えッ。(お君をお薦の方にやり、土間へ向う)

入口の戸が外から叩かれる。

お薦 あッ、来たッ。(纏めた荷を抛なげうち、お君を引寄せ、背
に負いかける)

辰三郎 (得物を求める)

茂兵衛 (外から声) ご免ください、相済みません。ちよつ
と申しあげます。お聞きくださいませ。

辰三郎 (度胸を据えて入口に行き、心張棒に手をかける)

茂兵衛 (声) こちらはお薦さんと仰有います方のお家うちじゃ
ございませんか、わたくしは川向うの人と交際つきあいを持たねえ

者でござんす。

辰三郎 (低声に) お蔦。お前を呼んでいる。

お蔦 あたしを、そんな人はない筈だ。

辰三郎 (聞き澄まし、お蔦に向いて) 茂兵衛という人だというが。(お蔦が知らないと首を振る、で、思い切つて戸を開ける)

茂兵衛 (土間にはいり) 相済みません、戸締りは元通り、なすつて置くがようござんす。

辰三郎 お前さんはどなた。

茂兵衛 お眼にかかったことはござんせんが、おかみさんのお世話になつた者でござんす。

辰三郎 え。

茂兵衛 (喫驚しながら怪しんでいるお蔦に向い、あががまち 上り框に

両手を突き重ね、頭をさげて小腰をかがめ、樂旅らくたび仁義の型で、お久し振りでござんした。その節はお助けを頂き有難うござんした。

お蔦　　そういうお前さんは、どなた、なんでございませう。

茂兵衛　お見忘れはごもつともでござんす。茂兵衛でござんす。

お蔦　　（独り言を）　思い出せないねえ。

茂兵衛　お約束を無にいたし、こんな者に成なり果はてまして、お目通りはいたさねえ筈でござんしたが、十年振りでこつちの方へ、流れてきたので思い出して、他所よそながらお尋ねしてえと、きよう小半日うろついて、それでも判らずにおりました、飲み屋の女が唄う鼻唄から気がついて、聞いて

みたら女飴屋の口真似だとか、それを手蔓てづるに方々聞き、ここへ来てみると子供の声で、昔聞いた節の唄、お蔦さん茂兵衛はモノに成り損ねましたが、ご恩返しごんがへしの真似事まねごとがいたしてえ。お納めを願います。(手早く金包を置いて)ご縁次第、又お目にかかります。ご免なさんせ。(帰りかける)

お蔦 あ、待つてください。

辰三郎 (お蔦に) 知らない人なのか。

お蔦 ああ、憶えがないんだ。

茂兵衛 思い出されねえのは却って仕合せでござんす、あ奴あいつかとわかつては面目ねえ。立退くなら早いがいい。事によつたら一里ばかりは。ご免なさんせ。(戸を開けて出て行く)

お蔦 だれだろう。

辰三郎 お君の唄を聞いたといったが、国の知った人ではな

いのか。

お蔦　いいえ、違う。判らないもの仕様がな。地獄で仏とはこのことかしら。頂いたこのお金があるから、旅へ出ても苦勞はない。

辰三郎　手間どってしまった。逃げる工夫はいくらもある。さあ、ここを出てしまおう。

お蔦　あい。

再び入口の戸が開いて、引返してきた茂兵衛がはいつてくる。

茂兵衛　（驚く夫婦を制して）出ちやいけねえ。悪いことになつてきました。

辰三郎　お蔦、とうとう逃げ遅れた。逢つて直ぐだが、お別れだ、お君を頼む。

お君 (辰三郎に縋り) どこへ行くの。厭だ、一緒に行くのう、お母さんもよう。

お薦 お前さん、不具かたわにされても、あたしは傍そばを離れやしないよ。

茂兵衛 大丈夫、そんなことを奴等にさせるもんじやござんせん。やッ、家うちの近くまでやってきたな。お薦さん、子供をキツチリ抱いて、ご亭主の傍にびツたり付いて。(外の様子に耳を向け) ここの家から外へ出るな。

辰三郎 えッ。

お薦 (じツと茂兵衛を見ている。見憶えがあるような気がしてきている)

茂兵衛 あらまし形かたがいたら、その時あ親子三人、志こころす方へ飛んで行くのだ。(外から戸を敲たたく。心張棒をとって振つ

てみる)

お蔦 あッ、思い出した。

茂兵衛 そうでござんすか。面目ねえ。(戸を開く、彦が顔を
出すのを突き出し外へ出て戸を閉める)

お蔦 (辰三郎に、茂兵衛のことを語る)

辰三郎 (驚きの余り、小さくなっているお君を背負いつつ、
お蔦の囁きを聞く)

外に喧騒が激しく起る。

第三場 軒の山桜

お蔦の家の前、桜の木の古い木と若木と二本植わって

あり、花が咲いている。

利根川が家の横にやや遠く見える。

茂兵衛が入口の前に棒を提げ立っている。

市、甚太、彦が茂兵衛に肉薄し、根吉は少し離れてい
る。

河岸山は儀十の傍に付いている。その一方にい、わいの
北公が二、三人つれて、立会人格で見ている。

茂兵衛 (黙って睨んでいる)

市甚彦 (三人は口々に「邪魔だ退け」「退けつたら退け」「退
かねえか野郎」と騒々しく俄がな鳴り立てている)

儀十 静まれ。(茂兵衛に) どの何者か知らねえが、邪魔
するな、退け。この家のイカサマ師の仲間だというなら、

次手に睡ねむらせてやってもいいぞ。

河岸山 (儀十に) 脛を一本、ちよツとやりますかな。

茂兵衛 手前か儀十とは。中相馬の人達に聞いてみる、評判が悪いぞ。手前よく堅気を脅かすとなあ、悪い癖だ。そんな奴には痛い目させるが一番薬だ。

籠彦 何だと、ナマいうな。(猪ちよ口い才ひに出る)

茂兵衛 まだ懲りねえか。そらよツ。(彦を叩きのめし、市、甚を叩き伏せ。河岸山が抜き討ちにかかるを打ちのめす。北公等が、一齐に組んでかかるので、棒をすて、取つて投げて目をまわさすのが角力のワザ)

儀十 (角力のワザならこちらの得手で、ニヤリとして、肌脱ぎとなり) 野郎、一騎打ちだ。棒をとるな、棄てろ。

茂兵衛 よし。(棒を棄てる)

根吉 (今までじつと見ている。敢然として儀十に先んじ

茂兵衛にかかる)

茂兵衛 (押え付けて顔をみる) お前はこの中では少しマシ

だ。退いてろ。

根吉 俺達には理も非もねえ。たった一つ意地ばかりだ。

(飛びかかる)

茂兵衛 (押え込んで) そんならお前ちつとの間、静かにな

れ。(当身^{あてみ}を食わせ、倒れるを少し介錯して、地に寝かす)

儀十 野郎ツ。こいつ。

茂兵衛 何をいやがる。(儀十を突き立て突き立て、小手を

とってブン廻し、手許に引付け家の中へ向って) あらまし

形はついたようでござんす。(儀十の急所を圧す)

儀十 (気絶する)

お君を負うた辰三郎、少し、荷を持ったお蔭が出来るだけの旅装で出てくる。

茂兵衛 飛ぶには今が潮時でござんす。お立ちなさるがようござんす。

辰三郎 お蔭から話を聞きました。僅わずかなことをいたしましたのに。

茂兵衛 いらねえ辞儀だ。早いが一だ。

お蔭 (人の倒れ伏すを見て) あッ。

茂兵衛 なあに死しに切りじやござんせん。やがて、この世へ息が戻る奴ばかり。

辰三郎 それでは茂兵衛さん。ご丈夫で。

お蔭 お名残りが惜しいけれど。

茂兵衛 お行きなさんせ早いところで。仲よく丈夫でおくら

しなさんせ。(辰三郎夫婦が見返りながら去って行くのを見送り) ああお蔦さん、棒ツ切れを振り廻してする茂兵衛の、これが、十年前に、櫛、簪、巾着ぐるみ、意見を貰った姐あねさんに、せめて、見て貰う駒形の、しがねえ姿の、横綱の土俵入りでござんす。(入口から家の中へはいる)

茂兵衛が桜の下に佇む。

茂兵衛 (気絶している者共を見張っている)

幕

昭和六年五月作

後註

- 一 ここから30字詰め
- 二 ここまで字詰め終わり

一本刀土俵入 二幕五場 第三場 軒の山桜

底本：「長谷川伸傑作選 暎の母」国書刊行会

2008（平成 20）年 5 月 15 日初版第 1 刷発行

底本の親本：「長谷川伸全集 第十六巻」朝日新聞社

1972（昭和 47）年 6 月 15 日発行

初出：「中央公論」

1931（昭和 6）年 6 月号

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそって、あらためました。

入力：門田裕志

校正：雪森

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。